The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	鷲田清一名誉教授　功績覚書
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2011, 42, p. 22-24
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23307
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

鷲田清一名誉教授　功績覚書

鷲田清一名誉教授は、昭和 47 年 3 月京都大学文学部哲学科を卒業、昭和 49 年 3 月同大学大学院文学研究科修士課程哲学専攻を修了し、文学修士の学位を授与されたのち、昭和 52 年 3 月同博士課程哲学専攻を単位修得退学した。

その後、昭和 53 年 4 月関西大学文学部講師に就任、同助教授、同教授を経て、平成 4 年 4 月大阪大学文学部助教授に採用され、平成 8 年 4 月同教授に昇任し、平成 11 年 4 月大学院重点化に伴い、同大学大学院文学研究科教授に配置換となった。その後、平成 12 年 4 月から 2 年間は大阪大学評議員を務め、さらに平成 15 年 8 月から平成 16 年 3 月までは同大学大学院文学研究科長・文学部長を務めた。続いて、平成 16 年 4 月から平成 19 年 8 月までは大阪大学理事・副学長、平成 19 年 8 月から平成 23 年 8 月まで大阪大学総長を務めた。

同名誉教授は、従来は未知であった哲学・倫理学のさまざまな領域を開拓したが、その功績は主として現象学、哲学的モード論・衣服論、臨床哲学の三つの分野に及ぶ。

第一に現象学である。初期の間主観性をめぐる論文群により、日本の現象学研究ではじめて「他者」の存在や「身体」をめぐる問題を新鮮な形で提起して、学界に強い刺激を与えたほか、現象学とさまざまな社会科学研究との接合を試みて、日本現象学・社会科学会の設立に主導的な役割を果たした。これらを素地として、世界で初の大規模な現象学の事典『現象学事典』を共同編集して、日本の現象学を欧米の研究水準に伍すレベルにまで引き上げ、さらに同名誉教授の著作『メルロ＝ポンティ』を含む《現代思想の冒険者たち》シリーズ全 31 巻の編集により、現代日本における最前線の哲学研究を集大成し、それを代表する存在となるとともに、同シリーズ全巻が中国語に翻訳されることを通して現代の日本哲学の水準を中国をはじめとする諸外国に知らしめた。

第二に哲学的モード論・衣服論である。現象学的身体論を発展させる形で、『顔の現象学』、『モードの迷宮』、『ひとはなぜ服を着るのか』などの著作を発表し、モード論や顔論といった、社会に開かれた斬新な研究局面を切り開くとともに、ファッション環境学会、日本顔学会の設立に参加した。こういった活動は「哲学に出来ること」を衝撃的な形で学界に知らしめ、広く社会の注目を集めたが、その切り口がどれほどすぐれていたかは、世界で活躍するファッションデザイナーたちの大きな関心を引きつけ、ファッションデザインの現場との深い結びつきのなかで、彼らとの数多くのコラボレーションを実現したことからも窺える。同名誉教授とともに、哲学は「街に出た」のである。

第三に臨床哲学である。現場感覚に裏打ちされた哲学的鋭敏さにより、日本で初めての、また世界でもほとんど類例をみない、「臨床哲学」の提唱に導いた。臨床哲学とは、哲学の思考を、医療・看護・介護現場、教育現場など、社会のさまざまな現場につないでいく開かれた試みである。同名誉教授は、この理念をもとに大阪大学大学院文学研究科に臨床哲学の研究分野（現専門分野）を創設し、同僚や多数の社会人大学院生とともに臨床哲学を展開したが、これは日本全国の哲学・倫理学研究者の注目を集めて、静岡大学人文学部における臨床人間学講座の先駆となる

など、従来は文献研究に偏りがちであった我が国の哲学界に社会にコミットする姿勢を求め、新たな方向性を触発した点で、きわめて顕著な功績であるといえる。のみならず、臨床哲学のマニフェストとも目される著書『「聴く」ことの力――臨床哲学試論』や『〈弱さ〉のちから――ホスピタブルな光景』、およびそれに続く多数の著作は、学問や職域の枠を越えて、「ケア」を真剣に考えようとする人々に幅広く読まれ、マスメディアなどにおける多彩な言論活動ともあいまって、臨床哲学は持続的な社会的反響を呼び起こしつつある。

以上のように時代をリードする先見性と多大な貢献を認められ、紫綬褒章（平成 16 年）を受章したほか、『分散する理性――現象学の視線』と『モードの迷宮』でサントリー学芸賞（平成元年）を、上述の『「聴く」ことの力――臨床哲学試論』で桑原武夫学芸賞（平成 12 年）を、『「ぐずぐず」の理由』で読売文学賞（平成 24 年）を受賞した。また、日本倫理学会会長ならびに常任評議員、日本哲学会理事ならびに委員、日本現象学会委員、日本現象学・社会科学会委員、アートミーツケア学会会長、国際日本文化研究センター評議員、国際高等研究所特別委員、人間文化研究機構・国際日本文化研究センター運営会議委員・副議長、人間文化研究機構評議員を歴任したほか、サントリー学芸賞選考委員、京都賞選考委員、伊丹国際クラフト展審査委員長を長期間務め、読売新聞読書委員、朝日新聞論壇委員・書評委員をも務めた。加えて、神戸市ファッション美術館の創設や京都服飾文化研究財団の運営にも関わり、NHK 人間大学での講座など、啓蒙活動にも意欲的に取り組んできた。学術行政への貢献も多彩かつ多大であり、文部省学術審議会専門委員、文部科学省子どもの徳育に関する懇談会委員・会長、文部科学省大学問題懇談会委員、文部科学省第五期科学技術・学術審議会専門委員、科学技術庁科学技術会議専門委員、日本学術振興会専門委員、内閣官房「21 世紀日本の構想」懇談会委員（小渕内閣総理大臣）、国立大学協会理事ならびに副会長、国立大学財務・経営センター運営評議会委員を務め、内閣府総合科学技術会議専門委員としては「ヒト胚の取り扱い方」についての答申執筆に参与した。地方自治体への貢献も顕著であり、神戸市総合基本計画審議会委員、大阪府、大阪市、京都府、京都市を中心に多くの自治体の委員・役員を歴任した。なかでも京都市基本構想審議会副会長、同基本構想起草委員長、同基本構想調整副委員長として京都市の基本構想の立案･起草に 2 年半携わり、「わたしたちは……」と市民を主語として、市民の口で語りだされる基本構想としては日本ではじめての画期的なものを作り上げたことは特筆に値する。

教育面について述べるならば、大阪大学文学部および同大学大学院文学研究科では、倫理学・臨床哲学を担当し、現象学を中心とする幅広い教授活動によって、また臨床哲学という新しい手法と観点から、多数の学部学生や大学院生を育成するのみならず、市民とも積極的に交流する、来るべき大学人の活動形態を身をもって提示した。平成 13 年 4 月からは同大学大学院医学系研究科教授をも兼任して「医の倫理学」を教授した。その他では、ルール大学（ドイツ連邦共和国）客員研究員、国際日本文化研究センター客員教授、東京大学大学院人文学研究科併任教授のほか、北海道大学、東北大学、千葉大学、東京大学、静岡大学、京都大学、京都教育大学、奈良女子大学、九州大学、琉球大学等で非常勤講師を歴任した。

大阪大学内における管理運営面においては、入学試験委員会副委員長のほかに、広報委員、設

置形態検討委員会委員、さらに同大学大学院文学研究科長･文学部長ならびに評議員を歴任した。とくに大阪大学理事・副学長ならびに総長としては、哲学的見識と臨床哲学的先見性に裏づけられて、「社学連携」を強力に主導するなど、大学の進むべき道を指し示し、独立法人化を含む著しい変革期における優れたリーダーシップを発揮した。また、平成 14 年 10 月より大阪大学 21 世紀 COE プログラム（「インターフェイスの人文学」）の拠点リーダーとして学際的な研究プロジェクトの統括に当たったことは、同大学のとりわけ人文系の組織にいっそうの求心力と推進力を与え、世界的な研究拠点としてより一段の充実・発展をもたらすうえで多大な貢献をなした。

（文、中岡成文）